

「世界自然遺産候補地に関する検討会」における利尻・礼文・サロベツの評価について

以下の資料は、平成15年3～5月に開催された「世界自然遺産候補地に関する検討会」の報道発表資料及び議事録より、利尻・礼文・サロベツに関連する部分を抜粋したものである。

■ 最終検討会（平成15年5月26日）終了後報道発表資料

世界自然遺産候補地に関する検討会について

平成15年5月26日（月）

世界自然遺産候補地に関する検討会

座長 岩槻邦男

（検討会の議論の経過）

当検討会では、3月3日（月）から本日まで、これまで4回にわたって世界自然遺産の候補地に関する検討を行ってきた。

検討会においては、我が国における自然環境の観点から価値の高い地域をできる限り広く検討対象とした上で、世界遺産条約上の世界自然遺産の登録基準への適合性を詳細に検討するため、面積要件や人為的改変度等により、19の詳細検討対象地域を抽出（別紙）し、当該地域について詳細な検討を行った。

（検討の結果）

詳細検討対象地域について、現時点で得られる知見、情報等に基づいて学術的見地から検討を行った結果、現段階では、以下に記述する3地域が、世界遺産条約に定める登録基準と完全性の条件を満たす可能性が高いものと考えられる。（中略）

（世界自然遺産の登録基準に合致する可能性が高いと判断された地域）

知床は、流氷が育む豊かな海洋生態系と、原始性の高い陸域生態系の相互関係に特徴があり、オオワシ・オジロワシ・シマフクロウといった世界的な絶滅危惧種の重要生息地となっているという点が評価され、登録基準に合致する可能性が高いと判断されたものであるが、そうした価値を保全するためには陸域と海域を含めた統合的な管理計画の策定の必要性について、今後の課題として指摘があった。

小笠原諸島は、多くの固有種・希少種が生息・生育し、特異な島嶼生態系を形成している点が評価され、登録基準に合致する可能性が高いと判断されたものであるが、移入種対策を早急に講じる必要があるほか、最も重要な地区の一部はまだまだ十分な保護担保措置がとられていないことからそれらの解決は喫緊の検討課題であるとされた。

琉球諸島は、大陸との関係において独特な地史を有し極めて多様で固有性の高い亜熱帯生態系

や珊瑚礁生態系を有している点、また優れた陸上・海中景観や絶滅危惧種の生息地となっている点が評価されるものであるが、絶滅危惧種の生息地など、重要地域の一部ははまだ十分な保護担保措置がとられていないことからそれらの解決は今後の検討課題であるとされた。

(議論が分かれた地域)

なお、以下の4地域については、検討会の結論としては集約できなかったが、世界自然遺産の登録基準に合致する可能性があるのではないかとの意見があった。

大雪山は、複数の火山帯から構成された複雑な火山地形と、広大な高山帯と高山植物の分布などが評価され、日高山脈は、特異な地質や急峻な地形と豊かな動植物相の存在が評価されている。

しかし、(中略)

飯豊・朝日連峰は、(中略)

九州中央山地周辺の照葉樹林は、(中略)

(今後の取組について)

今回の検討は、世界自然遺産の候補地足り得るかという視点で行ったものではあるが、我が国の自然環境を全般的に見渡して、世界との比較という点も含めてあらためて再評価したという意味で初めてとも言える作業として、高く評価できる。

すなわち、今回の検討会では、上記に挙げた地域のみならず、詳細検討を行った19地域をはじめ、我が国には世界に誇るべき自然地域が多く存在することが浮き彫りにされた。これを機に、今後ともこのような優れた自然環境を有する地域の保全・管理の努力を継続することを強く期待したい。

また、今回の検討はあくまで世界自然遺産の登録基準に照らして行われたものであり、これに合致しないため、もしくは合致しても類似の既登録地があるために候補地になり得ないからといって、その地域の持つ顕著で普遍的な自然の価値が否定されるものでないことを、改めて強調しておきたい。

さらに、今回の検討は、現時点において、学術的見地から世界自然遺産候補地としての要件を満たす地域を検討したものであるが、なお登録基準に即した学術的観点からの国外比較等に必要な知見や情報の不足も見られたことから、そうした知見や情報の収集・分析・検討は継続すべきである。また、現段階で登録基準への合致が証明できなくても、現在持つ価値を減じて完全性が失われないように、むしろその完全性を高めるように、保全・管理の努力も継続すべきである。そうした継続的努力により、将来新たな知見や情報が得られ、登録基準や完全性の条件への適合可能性が出てきた場合には、世界自然遺産候補地としての検討をあらためて行うべきである。

(中略)

最後に、世界遺産は推薦や登録することが唯一の目的ではなく、その地域の普遍的な価値を人類全体の遺産として将来にわたり保全していくことが目的であることを忘れてはならない。従って、推薦や登録をゴールとするのではなく、関係行政機関や地元住民などが一体となって、登録後も、長期間にわたる保護管理やモニタリングに尽力していくべきものであることを特筆しておきたい。

別 紙 <詳細検討対象地域・・・全19地域>

<u>利尻・礼文・サロベツ原野</u>	南アルプス
知床	祖母山・傾山・大崩山、九州中央山地と周辺山地
大雪山	阿蘇山
阿寒・屈斜路・摩周	霧島山
日高山脈	伊豆七島
早池峰山	小笠原諸島
飯豊・朝日連峰	南西諸島
奥利根・奥只見・奥日光	三陸海岸
北アルプス	山陰海岸
富士山	

■ 第2～4回検討会議事録

<第2回検討会（H15.3.25.）>

○座長 （中略） そうしますと、知床、大雪山、日高山脈に関しては、特にご異論がないということになりそうですが、利尻・礼文と函岳・ピヤシリ岳とを統合して1つにというご提案ですけれども、これについてもうちよつと議論していただけますか。

○三浦委員 サロベツです。

○座長 地域名の2番ですか。ごめんなさい。ここでは消えてしまっているところですね。利尻・礼文にサロベツを加えて検討の対象にしようということですね。いかがでしょうか。

○小泉委員 そこはそこですごく特徴を持っていて、礼文島は、ご承知のように海岸から高山植物があるという、全体が氷河時代のツンドラの生きた化石みたいな……。そういう意味では、さっき世界的に見た場合どうかという話になりましたけれども、もしかしたら氷期のレリックの非常によく残ったという意味では、あまりほかに事例がないので、特徴としてはかなりアピールできるかもしれないという長所があると思います。

<第3回検討会（H15.4.22.）>

○座長 （中略） 比較のところにも出てきていますように、ロシアのシホテアリンが世界遺産に既に登録されていて、それとの比較が必要なのですが、上野委員がそこへは行かれたことがあるそうですね。北海道も5カ所ともよくご存じですし、そういう比較も含めてちょつとご紹介いただけますでしょうか。

○上野委員 シホテアリンは結構広い地域ですし、北部と中央部と南部とまるっきり違いますけれども、生物面から見ると一番生物相の豊かなのが南部で、中央部がそれより少し落ちて、北の方は非常に貧弱になります。ここではシホテアリンの中央部と書いてありますが、ほと

んど手つかずの地域ですし、範囲が広く南北に長いということで、随分さまざまな要素が含まれている。日本の場合、今取り上げてあるような5つに分割いたしますと、これはシホテアリンに比べると随分細々した単位のものになると思います。どれだけの変化を1つの地域の中に取り込むことができるのかというのは、私はよく分かりませんが、利尻・礼文とサロベツとは随分違うと思いますし、逆に知床、阿寒・屈斜路は割に近いだろうという気がします。そういうふうに見て考えますと、シホテアリンはもちろん山ですから、サロベツ原野みたいな感じのところはないわけですね。海岸まで山が迫っていますから、その地域の中にはないと思います。もちろん利尻・礼文みたいな隔離された場所でもないわけで、非常に狭い地域の中でいろんな分化が見られる、あるいは遺存種が見られるということもない。(後略)

○小泉委員 今、日本の場合、シホテアリンに比べて面積が非常に小さくて細々しているという話があったのですが、全体の今回の検討地域を見てみますと、国立公園の指定に引きずられているところが結構あります。例えば利尻・礼文・サロベツを一緒に考えるということもそんなことだと思いますけれども、この間、北海道の自然保護協会から来たお手紙を見てみますと、大雪山から日高までまとめて考える、知床と阿寒・屈斜路・摩周はつなげて考えた方がいいのではないかとというふうな提案がありましたけれども、シホテアリンとか、そういうのと比べてみると、この辺はまとめた方がいいような気がします。(後略)

○大澤委員 今のご意見と一部は一致するのですが、(中略) それから、利尻・礼文・サロベツもなんとなく周りにある似たようなものを集めたような印象で、それをユニバーサルバリューという形で提示する上で、はっきりとした説得力が出るのかどうかという意味でちょっと疑問を感じます。

<第4回検討会 (H15.5.26.) >

○奥田(環境省) (中略) それでは、前置きが長くなりましたが、それぞれの地域について、この表での整理を簡潔にご説明したいと思います。

利尻・礼文・サロベツ原野でございます。ここで価値としていろいろ挙げられるかと思いますが、主にクライテリアの書きぶりに照らしてみますと、生態系、自然景観、そういったところが非常に有利な条件があるのではないかとということで、氷河時代の遺存種ですとか固有種の存在、海拔0mからの高山植物が売りにあろうかと思えます。生態系に関しましては、長期的な保全を維持する要素をカバーしているということで完全性の条件は満たすかもしれないということですが、近隣地域にも同一種とか近縁種が見られるという点は、この卓越性を証明するには十分な検討が必要かと思っております。あと、景観の面だけではないと思いますが、北海道の本土部のサロベツ原野につきましては、ある程度人為の影響は否めないということで、これはこの後のところに全部かかってきますけれども、世界遺産の考え方自体が人為の影響をなるべく受けていないところというのが基準の考え方としてあるかと思っておりますので、これは不利に働くかと思えます。

国内外の既登録地等との比較は、ここではカムチャツカという i から iv のすべて評価されているかなり広大な火山を中心とした登録地がございますが、この中の湖ですとか川ですとか湿

原、山がそろっているところは、この利尻・礼文・サロベツ原野に共通するところもありまして、大きさ（スケール）の面ではかなり不利な要件かと思えます。

管理計画・保護担保措置につきましては、国立公園等が指定されていますけれども、かなり厳しい規制のかかる区域の割合は低くなっています。これにつきましては、供覧用の地図を参考に机の上に配ってあるかと思えますけれども、それをごらんになっていただきたいと思えます。残りのところも、この中で国立公園につきましては赤い枠で囲ってありまして、森林生態系保護地域等の保護林につきましては緑、その中で特に国立公園・国定公園等、厳しい規制のかかるところにつきましてはピンクですとか薄い紅色の網がかけられているところがございます。また、原生自然環境保全地域・自然環境保全地域につきましては青で塗ってございます。こうして見ますと、大体どのぐらいの割合が厳しい地域になっているかというのはおわかりになるかと思えます。以上が利尻・礼文・サロベツ原野の私どもの方の評価のポイントかと思えます。

（後略）